

# 正月特訓／指示語編

指示語の問題を考えるとときには、次の手順で進めていく。

- ① 指示語はその「**文のなか**」でどんな働きをしているだろうか？  
↓まずはこれがヒントになる。(下段参照)
- ② 指示語の指す内容は「**前にあることが多い**」ので、まずは前の部分をよく読もう。
- ③ 指示語の指し示す内容は「**後ろにある場合もある**」ので、後ろの部分もチェックする。また、単独で答えにならなくても、**前の部分を補う言葉**がある場合も多いから注意する。
- ④ 指し示す内容が見つかったら、実際に指示語の位置に置いて読んでみる(「**代入する**」、とも言っ)。  
↓ここで、意味がちゃんと通じるかどうかをチェックしよう。
- ⑤ 上手く文が繋がらない時は、**足りない言葉を付け足す**といい  
↓言葉を見つげるために、もっと長い範囲を読んでみよう。
- ⑥ 言葉のつながり具合が大丈夫なら、**そこでおしまい!**

**後は練習あるのみ!**

## ・「文中での働き」

文中の働きは、「英語のように」S V Oを分析をしていくとわかりやすい。

ここでは、

S ∥ 主語 (〜は・が)

O ∥ 目的語 (〜を・に)

V ∥ 述語 (〜する・である)

というふうに考えよう。

## ・「代入する」

(例文)

木々との共生を喜ぶと私は考えているけれども、ひよつとすると／それは／傲慢な思い込みであるのかも知れない。

(小塩節・『木々を渡る風』)

#傍線を含む文が、「それは」∥「思い込みであるのかもしれない」という文構造をしているのがヒント。

「木々との共生を喜ぶこと」か、「〜と、私が考えること」かは、そうやって決めればいい。

## 問題A (ウオーミングアップ)

○次の傍線を引いた部分が指す言葉を、できるだけ本文の言葉を使って答えなさい。

1 たしかに紙と人間とのかわりの歴史は古い。一〇五年、後漢の宦官<sup>かんがん</sup>技術者、蔡倫<sup>さいりん</sup>が紙を発明したという伝説を信じるならば千九百年間、じつさいには、おそらくそこに数百年をくわえたぐらいの長い時間を人間は紙とともに生きてきた。日本でいえば千四百年。ヨーロッパはアジアよりもかなりおくれで八百年ほど。ただし、その間、人間は一貫して、いまと同じようなしかたで紙とつきあっていたわけではない。だいいち紙の生産量が、いまとは比較にならないほど少なかった。こうした状態が一変して、人間が紙を空気や水のように使いたいだけ使えるようになったのは、ようやく二十世紀にはいって、思いきりさかのぼっても、せいぜい十九世紀なかばすぎのことにはすぎない。

2 しかし、何と皮肉なことだろう。人生のなかでいちばん大切なこの時期は、当人にとつてはまったく意のままにならない、いわば、あてがいぶちの期間なのである。ただ置かれた環境に甘んじ、与えられた条件に忍従する以外にない、そういう時期なのだ。

3 『菊と刀』は、もともと、第二次大戦中に、アメリカが対日文化戦略の一環として、へもつとも得体の知れない敵<sup>てき</sup>日本の文化を研究したものである。だから、かなり特殊な事情のもとになされた研究であり、こまかくいえばいろ

いろ問題がある。だが、この本は、自覚的に〈類型論〉の立場をとったものであり、そういうものとして十分な成果を挙げている。

4 アホウドリ(信夫翁、阿房鳥)という、生物の種に対する日本語の名称のうちで全国で統一的に使用される標準的名称(標準和名)をもつ大型の海鳥がいる。私は、この明らかな蔑称をやめて、二十一世紀にはオキノタユウ(沖の大夫)と和名を改称したほうがよいと思っている。必要なら、アホウドリは愛称あるいは別名として残せばよい。そんな名前と呼んでいた人間のほうが、愚かだったことを思い起こすために。

\*蔑称⇨相手を軽蔑するという呼び名。

5 図に見るように、最初の三五〇分までは急速に細胞が増えていき、1つの受精卵が約五六〇細胞になる。これを胎発生前期といい、この後の後期(四五〇分間)では、細胞分裂で新しくできる細胞と、アポトーシスで死ぬ細胞がバランスするので細胞総数は変わらない。

## 問題B

1 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

吉行淳之介さんと実際に初めて会ったのは芥川賞のパーティの席だった。パーティは夕方の早い時間に始まっていて、東京会館の大ホールに夏の西陽が

カーテンの隙間から差し込んでいたのをおぼえている。吉行さんは照れたように笑って「君が村上龍か、若いなあ」と言い、「オレは君のオヤジさんと同じ歳だぜ、イヤになつちやうよ」と言つて腕を組んだままグラスの水割りを静かに飲んだ。

実際に、と書いたのは、それまでに私は吉行さんの芥川賞の「選評」と出会つていたからである。「……『因果なことに才能がある』……」とその選評の中で、カギカッコ付きで書かれ、私は喜んでその後当惑する、といった奇妙な感情を持った。そして、その感情は今も同じように続いている。

(問)「それ」のさす内容を一五字以内で書きなさい。

2 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

右は(注・省略した)私の父の明治三十八年春の日記の一節である。並んでいる下宿屋の無数の窓に明々ともまれた灯の下、貧しい学生たちが一心に書物を読んでいる姿を想像して胸を打たれた父の、その青年への想いが私の胸にも熱く伝わってくる。日本が貧しく矛盾に満ちていた時代、刻苦<sup>こつくべんれい</sup>勉励<sup>めいれい</sup>という言葉が生きていた時代だ。

貧しさ故に若者は考えた。鬱屈<sup>ふさふさ</sup>して考えるが故に広大な未来があつた。可能性に満ちた洋々たる前途、夢があつた。それが若者の貧しい青春に輝きを与えていた。

今、豊かさのみを追つて考えることをやめた我々にどんな未来があるのだろうか。若者たちを含めた我々は何に向かつて生きようとしているのか、更なる豊

かさと安住に向かつて？

だがいったいそこにある希望とはどんなものなのだろうか？

(問)「それ」のさす内容を句読点を含めて五〇字以内で書きなさい。

### 問題C

○次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

万葉集は源氏物語とらんで、日本の古典文学を代表する作品です。かつて東京大学文学部の教室で、日本の文学作品の中から十をあげて、そのあげた理由を説くような問題を出したことがあります。その場合に、万葉集と源氏物語とをあげなかったものはなかったのです。枕草子や平家物語や近松や西鶴や芭蕉はそれについて多く、さらに古今集、徒然草、蕪村などがあげられました。このように万葉集が日本文学の代表的位置を占めているのはどういう理由によるものでしょうか。

(問)「このように」のさす内容を四〇字以内で書きなさい。



## 正月特訓 指示語編 (解答)

### 問題 A

#### (解答)

- 1 紙の生産量が、非常に(いまとは比較にならないほど)少なかった  
↓「状態」に繋がる形。( )の表現も許容。
- 2 ただ置かれた環境に甘んじ、与えられた条件に忍従する以外にない  
↓「時期」に繋がる形。これより前の部分まで書いてあれば減点する\*「期間」、「時期」で並列されているから。
- 3 自覚的に〈類型論〉の立場をとったもの
- 4 アホウドリという  
↓「蔑称」に繋がる形。
- 5 急速に細胞が増えていき、1つの受精卵が約五六〇細胞になる最初の三五〇分  
↓「まで」に繋がる形。「前期」という「時期」で受けているので、それに相応する言葉でまとめてあればよい。

### 問題 B

#### 1 (解答)

「それ」⇨芥川賞のパーティの席での出会い (一五字)

↓まずは、「それ」が文中でどんな働きをするのかを考えてみよう。

「実際に、と書いたのは、それまでに私は吉行さんの芥川賞の『選評』と出会っていたからである。」という文を見ると、ここでは「それまでにく出会っていた」というつながりになっている。文全体の意味は、「実際に」会ったのは「それ」が「初めて」だが、「選評」では先に「出会っていた」ということ。ここから、「それ」というのは、吉行淳之介との選評以外の出会いのことになる。ようするに実際に会ったのは、どこか、ってことだね。

まとめるときは一五字に近くなるように、言葉を整理して良い。「芥川賞のパーティの席」はやや不十分で、「席」であれば、むしろ「そこ」で受けるだろう。「出会い」という言葉を自分で付け足して、まとめておこう。

## 2 (解答)

**豊かさのみを追って考えることをやめた我々が、今向かって生きようとしている未来。(三十九字)**

↓「だが／いつたい／そこに／ある／希望とは／どんなものなのだろう?」より、「そこ」とは、「希望」のありかである。ここから「我々の」「未来」をキーワードにする。

字数にかなり余裕があるので、「だれの」、「どのような」未来なのかまで説明することができる(制限字数しだい、どこまで書くかは変わる)。

「我々」は「過去の若者」と対比されていることを考えて、「豊かさを追わない」「考えない」「ことを書く」とうまくまとめることができる。

## 問題C

### (解答)

「このように」<sup>#</sup> 東京大学文学部の教室で、全員が代表的な日本の文学作品として万葉集をあげたように (三九字)

### (解説)

一見して、指示語だらけの文だと気づくよね。前の文の内容を受けて順々に進む、論理的な文だと言ったことができるだろう。

「このように万葉集が日本文学の代表的位置を占めているのは」という部分を読むと、「このように」という言葉は「万葉集が日本文学の代表的位置を占めている」というまとめ部分に続いていることがわかる。

この問題は事実上、「万葉集が日本文学の代表的位置を占めている」のを説明した部分をまとめる問題なんだ。指示語なのに、何で「まとめる問題」が出るんだろっと思いかもしれないけど、「つまり」の代わりに「このように」を使うというのは接続語のところでも出てくるよ。

内容を検討しよう。「万葉集」が「日本文学の代表」とわかるのは、前のどの部分からだろうか？そう、「学生が選んだこと」以外には「日本の文学作品」と「万葉集」はつながらないものね。これらをちゃんと含むようにまとめやれば、OKだ。

# 「ように」には例示の働きがある。  
↓ 「たとえばように」



## 補充問題

(絵地図研究の歩みの)第一は、地図発達史ともいうべき流れで、最初は「荒唐無稽」であった絵地図が精度を高めていって、だんだんと現場や生活世界をいかに「正確に」表現するようになっていったかという観点から、絵地図をあつかうものである。いいかえれば、これは、地理的な知識や情報の体系化のあとを絵地図から近代地図への発達過程として、進化的にとらえようとするものである。たとえば、北海道の古い絵地図を時代順に追うことによつて、北海道の表現がどのようにして現在の地図にみられるようなものへと進化していったかを追跡していくのは、この流れに立つ研究の例である。このような視点からの研究には、近代的な地図ほど「正確」であり、「進んだ」地図であるという暗黙の前提があつた。



(補充問題・解答)

「このような」は最初は「荒唐無稽」であった絵地図が精度を高めていって、だんだんと現場や生活世界をいかに「正確に」表現するようになっていったかという

# 「このような」は指示語だが、現実の用法としては「まとめ」になっていることが分かると思う。

指示語と接続語をまとめて「連結語」としてしまう理由はここにある。

## 指示語／問題演習編

○傍線部の指示語が指す内容を簡潔に答えなさい。

### 問題1

無意識の発見 は二十世紀の最大の業績のひとつに数えられているが、日本人は早くからそれに気づいていた。といつても、フロイトのように、実験的、臨床的につきつめたわけではなく、科学的に分析したわけでもない。しかし、人間が得体の知れぬ何ものかに左右されるものであることを日本人は漠然と感じとつて、それを「虫」のように表象したのである。

(国士館)

### 問題2

時流の向きによって、脚光を浴びる過去の文学者、芸術家の顔触れもちがってくる。いかなる時代にも変らない人気を保っている作家もいて、たとえば漱石などはその意味での古典的作家であろうし、芥川も小粒ながら漱石に近いようなところがある。ところが坂口安吾、太宰治、石川淳などの口「無頼派」にはそうした安全な」位置はまだ与えられていないようだ。

彼らが漱石よりもずっと時代が新しくなったからという理由もあるだろう。しかしそれ以上にこれは、「無頼派」の本性が「安全」な定位置を拒んでいるため

(都留文化大)

ある。その中でも、大衆的人気の点では一番とつきがよくなかったのが坂口安吾といえた。ところが最近なぜか安吾に向けて関心が熱くなってきた気配がある。時代と波長が合ってきたのだ。

### 問題3

映画としての『外科室』は五〇分という短尺ながら、三つの部分、というより三つの層から構成されている。まず狂言回しの画家(中井貴二)が植物園を訪れ、桜の森の満開の下で、あたかも晩年の折口信夫を彷彿させる老園丁と対話をする場面が、冒頭に置かれている。ここで白蛇が現われるという事件が生じるが、原作にはそれに相当するものはない。鏡花の幻想世界に長らく親しんできた監督が、その象徴として登場させたものであろう。これはフィルムムの終りにも反復され、作品全体の枠組みを形作っている。第二に、その語りのなかに登場する回想として、いよいよ伯爵夫人が執刀されることになった当日の病院のシーケンス。最後にこれが分量的にはもつとも長いのだが、さらに九年前の植物園での夫人と医師の、一瞬の邂逅を語る回想場面が控えている。

### 問題4

日本人にとつて、食器は所持者の実存の象徴としてあつかわれてきた。それは個人の私権を擁護するさまざまな制度など、およそ近代社会の創出した理性の産物とちがひ、それ以前の、より根元的な世界に所属している。おなじ類のものをヨーロッパ世界の伝統的な生活習俗のなかに求めるなら、家や部屋の鍵などが a

(中部大)

(仏教大)

それに当たるだろう。日本人は友好のしるしとして、同盟のあかしとして酒席で盃を共にしてきた。日本座敷の日本料理の席でなされる盃の執拗な献酬は、その残留形式である。bこれに似た西洋の習慣は、鍵の贈呈だろう。名誉市民の称号を贈ったしるしに、その市の紋章入りの金・銀製の飾り鍵を手渡し、それを友好のしるしとする風習などは、いまだでは日本でもまねられている。

○ a、bの指すものを次の選択肢から選びなさい。

- 1 酒席で盃を共にすること
- 2 旧来の共同体の最終的な解体
- 3 伝統的な生活習俗
- 4 鍵の贈呈
- 5 日本料理
- 6 近代社会の創出した理性の産物
- 7 重化学工業を指標とする第二次産業革命
- 8 所持者の実存の象徴
- 9 二十年代（一八九〇年前後）に進行した産業革命

## 問5

翻訳文化にはときどき妙な落とし穴がある。同じ一つの名詞の翻訳であっても、「主観的」というと聞こえが悪いが「主體的」というと立派に見えるというのも、その一例だろう。しかしこれは、半分は言葉のあやである。ドイツ人がズプイェクティーフというとき、それを認識論的に主観の意味で使っているときでもそこ

（中京大）

には必ず行為主体の意味が隠されているし、逆にこれを実存論的に主体の意味で使う場合にもやはりそこには認識主観の意味もこめられている。これをきつぱり訳し分けてしまった日本人だけがそれに振り回されて右往左往することになる。

## 問題6

十九世紀フランスの政治学者、トクヴィルは、『アメリカの民主政治』のなかで、アメリカインディアンは、とても残念なことだが、将来滅んでしまうだろうと書いた。その理由は、トクヴィルによれば、次のようなものであった。

インディアンたちは、労働によつて富を蓄積していく暮らし方を、これまで拒否してきた。神からの恵み、つまり自然からの恵みを受けながら、神 $\parallel$ 自然とともに生きていく、それが彼らの暮らし方であり、そこからインディアンたちの文化も生まれた。

このような営みを維持しようとするれば、広大な自然が必要になる。ところがアメリカに渡つた白人たちは、日々インディアンたちの大地を奪い続けている。それは、インディアン的な暮らしと文化が、維持できなくなることを意味する。

この事態に対して、インディアンたちが、武力をもつて抵抗しようとするれば、彼らは白人の武力の前にほろぼされてしまうだろう。逆にそれから逃れ、生きのびようとするれば、白人の文化を受け入れ、白人たちと同じように、労働によつて富を蓄積していくような暮らし方をしていくしかないだろう。だがそうすれば、インディアンらしい暮らし方も、彼らの文化も消滅し、それもまたインディアンがほろんでいく道だ。トクヴィルは、このように書いたのである。

(山梨大)

## 問7

今回の芥川賞候補作品を含めて、このごろ頃の若い人の新しい作品を読む度に、以前多くの先進国で学園紛争がたけなわだった頃レイモン・アロンと話し合った時彼がいった言葉を思い出す。

「私は今の若い者たちに心から同情している。現代は彼等から青春のために欠かすことの出来ぬものをすべて奪ってしまった。第一に貧困、次に戦争、そして死ぬ気でぶつかりたくなるような偉大な思想だ。それをみんな奪われて、彼等が苛立たぬ訳がない」と。

—あながち皮肉な逆説とはいいい切れまい。

最近の若い人たちの作品を読むと、アロンのいう今は失われたそれらのものが溢れていた時代には無かった別の喪失が、この現代には歴然としてあるのがわかる。それは充足への渴望や生命の危機、あるいは必死の超克を願う精神の障害物としての思想が保証してくれた人間としての存在感といえる。

## 問8

「かけがえがない—いのち」という言いまわしは、私たちにどういうイメージを与えるだろうか。「かけがえのない」とは、辞書のような理解の仕方をすれば、代わりがないこと、予備がないことというようになるだろう。一般には「世の中に二つとないもの」のようなものに対するイメージがそこにこめられている。そこまでは感覚的にわかる。しかし「かけがえがない—いのち」という言い方になると、代わりがない、予備がない、世の中に一つしかない、というよう

(武庫川女子大)

(近畿大)

な理解だけではうまく理解できなくなる。というのも、注意してみれば、そういうものは結構たくさん身の周りにあるからである。たとえば道端を歩いている他人の子どもを見てみる。その子にはきつと、代わりがないし、予備がないし、世の中に一人しかいない子であることは間違いない。しかしだからといって、その子がわたしにとって「かけがえがないーいのち」ということになるかと言えば、けっしてそんなことはない。世の中に一つしかないものであっても、私にとってどうでもいいものなんて、たくさんある。しかし、そこに歩いている子が、自分の子であるのなら話は違ってくる。自分の子なら当然「かけがえがない」と感じてしまうからである。

## 問9

死んでゆくものたちの目が最後に見ている景色というようになことを考えています。

『花をたてまつる』という御本の「いまわの花」という御文章では、あの現代の非業の病に八つばかりでみまかつてしまった少女が、たぶん最後に見ることのできた花の色のことを記しておられます。工場の廃水の毒で目のみえなくなった少女が、その春の日に縁側にまでいざりでて、首をもたげて母親にいう。

なあ かかしゃん

しゃくらははなの

咲いとるよう

(明治大)

いつくしさを　なあ  
なあ　しゃくらはなの　いつくしさを  
なあ　かかしやん　しゃくらの　はなの

母親は娘のひとみに見入って、「あれまだ……、この世が見えとつたばいなあ」と。

桜の時期になると、いつもこのことを語らずにはいなかった母親は、ただ、この娘がこの生のうちにこの花の色を見てから死んだことだけを、「よつぽどよかつた」と思いなぐさめておられるのでした。

人にとつてへしゃくらはなとは、何なのだろう。この少女と母親の無念は、何によつてもつぐなわれることのないものだけども、たとえばもう少しは長い年月を、ふつうに近く生きられた人間になら、その景色を見た、ということだけで、自分の死と生を納得して受け入れることのできるような、そういう景色というものがあるのだろうか。

## 問10

どうすれば、喜ばしき形の学問があり得るのか。どうすれば、上述のような意味での「自己解体」があり得るのか。その点について私はこんな風に考えている。一つの比喩を使わせて載こう。見ず知らずの外国へ行く。使われている言語も違う。日常的習慣も違う。人間なら生理的に共通にプログラムされていると言われる顔の表情でさえ、自分とは違う。葬式で涙を流さなければならぬ民族、葬式

### (補問)

「この少女と母親の無念」とはどういうことか、句読点を含まないで二十五字以内で説明しなさい。

### (早稲田)



で泣いてはならない民族、相手の目を真直ぐ見詰めて話さなければならぬ民族、そうすることを失礼と考える民族、ボディ・ランゲージで発する信号のそれぞれが、民族を超えると異なり、国境を超えると変る。

そうした異文化と接触したとき、われわれは驚く。その驚きは、もとより、未知のものに出会うことによつて触発される驚きには違いないが、しかしそれはまた同時に自らのなかにあるものを発見した驚きでもあると言えよう。

自分のなかにあると思つていなかったもの、当然の前提として自分がその上に載つていながら、それがあまりにも当然の前提であるがゆえに、それを対自的に取り出して検討してみることさえ、全くなし得なかつたものに、それとは全く違つた前提に立っている存在との接触を通して、初めて気付かされる。その種の驚きもまた、同時にそこには含まれている。(注・一五字以内で)

メガネを書いてみよう

